

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2020

課題番号：15K02563

研究課題名(和文) 日本語副助詞の史的変化にみる名詞性の研究

研究課題名(英文) A Historical Study on Nouniness of Japanese Adverbial Particles from Historical Perspective

研究代表者

宮地 朝子 (MIYACHI, Asako)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：10335086

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では、日本語の「名詞性」について、副助詞が示す名詞的な振る舞いと、その歴史的变化に着目して考察した。その結果、次のことが明らかになった。(1) 副助詞類は、その出自が名詞か否かに関わらず、通時的に幅広く名詞としての分布を示す。(2) 副助詞の示す名詞性は、副助詞が本質的に持つ意味的な特質(量性)や、形態的な特質(無活用)に矛盾しない。(3) 名詞の諸性質の中でも、無活用という形態論的特質が、副助詞の名詞性を支える基盤である。(4) この形態論的特質は名詞の文法変化、さらには副助詞のような機能語の文法変化も支える特質であると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず、副助詞の史的様相の観察から名詞性を追究するという独自の問題設定に学術的意義が認められる。名詞という一般性の高い枠組みを通じ、副助詞研究における離散的な関心を統合するのみならず、名詞研究に新たな視点を提供し、その進捗を促すことができる。名詞の文法変化という観点は、日本語文法史における名詞の機能語への体系的参与という一大課題の解明にも示唆を与えうる。近年、内外の言語学研究において言語の動態を追究する文化化研究が大きな潮流をなしている。日本語で豊富に観察される名詞の文化化について、名詞本来の性質と日本語の動態の関わりをあぶり出し、言語研究に有意な事例を提供する点で大きな意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：In this study, we considered the “nouniness” of Japanese by focusing on the noun-like behavior of adverbial particles and the aspect of their historical changes. This study mainly clarified the following four issues. (1) Adverbial particles show a wide distribution as nouns throughout the time, regardless of whether their origin is a noun or not. (2) The noun nature of particles is consistent with the semantic characteristics (quantity) and morphological characteristics (indeclinable) of adverbial particles. (3) Among the properties of nouns, the morphological characteristic of conjugation is the basis that supports the noun nature of particles. (4) This morphological characteristic is considered to be the characteristic that supports grammatical changes in nouns and grammatical changes in function words such as adverbial particles.

研究分野：日本語学

キーワード：副助詞 名詞性 文法変化 機能語化 副詞

### 1. 研究開始当初の背景

現代日本語の副助詞には、ダケ、バカリ、クライ、ホドなど、名詞由来の形態が多く存在し、一類型をなしている。主な副助詞のおおよその確立や諸用法の出現時期、変化の過程については少なからず記述が蓄積されてきた。一方、副助詞には名詞以外の要素から成立した形式も少なくなく、その規程や分類の観点において見解の相違が大きい。副助詞の確立過程については、意味的にも統語的にも、客観的な基準による記述と、変化や多機能に構造的な説明を与えるという課題の余地が大きく残されている。

副助詞の諸用法については、形態的な同一性を重視し、名詞に直接下接し格助詞に前接する接尾語用法(a,b)、連体修飾を受ける形式体言用法(c,d,e)、格助詞句ははじめ連用成分へも下接する「とりたて用法」(f,g)という諸用法があることが知られ、そのすべてまたは複数を併せ持つものを副助詞とする見方がある(城田俊 1986「副助詞について」『国語国文』56(3)等)。多機能を副助詞の本質とみる立場である。

例(a)人数分だけ用意する (b)息子だけを信用している (c)長男だけに器用だ  
(d)あとは客を迎えるだけだ (d)苦労しただけ優しい (e)あればあるだけ重宝する  
(f)君にだけ話す (g)教科書を買っただけはした

また上の分布は、(f,g)をのぞいて名詞の文中分布に重なる点も重要である。副詞性の機能語とされる副助詞が、名詞的な振る舞いを示すのはなぜだろうか。この点については、従来、名詞出自という歴史的由来に基づいた理解に止まっているが、この説明は、名詞に出自を求められない副助詞に適用できないのみならず、副助詞が副詞性の助詞として十分に文法変化を果たした後も、(a-e)のような名詞的な分布を示し続けることを説明できない。副助詞の多機能と名詞性の関係、副助詞の持つ副詞性と名詞性の関係については、再度多角的に考察する必要がある。

日本語文法論においては、近年とくに、名詞の理論的研究が隆盛であるが、形式名詞や、値名詞、数量詞といった“周辺の”名詞の下位類についてはほぼ対象外とされ、むしろ副詞としての位置づけが一般的となっている。名詞研究と副詞研究の有機的な接続は進捗しているとはいえない。副詞性の機能語の示す名詞性の研究は、名詞性の広がりや相互関係、全体像の整理という点からも要請されている。

### 2. 研究の目的

日本語の形式化・文法化現象の一類型として、名詞由来の副助詞の確立過程と多機能に着目し、その動態と変化を支える普遍不変の構造を追究することにより、日本語の名詞の文法的性質を明らかにする。現代日本語の副助詞は、多機能によって特徴付けられる助詞である。連用成分にも下接して完全な助詞の様相を示す一方で、多くの意味機能において名詞の出現位置にも分布する。副助詞個々の多機能や、歴史的変化の過程に関する従来の記述的研究に構造的な説明を与えるには、その統語構造上の位置の解明とともに、日本語の名詞句の文法性や統語的特徴の内実の整理が欠かせない。一方、名詞性を示す形式語や数量表現は名詞研究において対象外とされやすい。副助詞の示す名詞性とその動態から、名詞の文法的特性の整理解明を試みるものである。

### 3. 研究の方法

副助詞の多機能・史的变化に整合的かつ構造的な説明を与えるために、副助詞としての諸用法の成立・獲得について、「名詞性」を示す分布を観点として観察し、個別の制約と特性を考慮しながら、事例研究を蓄積していく。より具体的には以下の3点を方法とする。

#### (1) 「名詞性」の指標となる観点の整理

まず必要な課題は、共通の枠組みが確立していない「名詞性」の内実、何をもって名詞性を認めるかについて、周辺性、段階性を含めて、意味・形態・統語的現象面の整理を行うことである。もとより、副助詞の名詞性を考察することは、周辺からのアプローチである。従来の、名詞、形式名詞研究のみならず、副詞研究の成果や、名詞の形式化・文法化という見方で記述されてきた、副助詞類：ダケ・キリ・ホカ等の歴史・共時的な言語事実を念頭に、理論的考察を行う。

名詞性を示すとされる統語位置を形式ごとに洗い出したうえで、その出現位置や分布に対し、史的な出現順や、範疇性、状態性、数量性、時間・空間性、程度性などの尺度から見た意味特性、および形式性(非自立性)を含む形態論的な特性を加味した整理を試みる。

#### (2) 範疇としての副助詞と、名詞性の関わりについての再検討

副助詞と名詞性の関係が、範疇的な特質とどういうのか否か、古代語と現代語で違いがあるか、検討して考察する。古代語副助詞(ノミ・バカリ・マデ・ナド・シ・ダニ・スラ・サヘ)と現代語の副助詞(ノミ・バカリ・キリ・シカ・ハ・モ・マデ・グライ・ホド・ナド・ナンテ・ナンカ・シカ・ヤラ・トカ・ダニ・スラ・サヘ...)について、歴史的出自(名詞かそれ以外か)のほか、意味機能面(程度・限定、極限、例示・並列)や、形態統語的な下位分類(連用句内で機能する類(第1種)、連用句外で機能する類(第2種))といった観点から、名詞性との関与の可否や濃

淡に違いがあるかを考察する。

### (3) 個々の副助詞の史的変化・動態の把握の精緻化

(1)(2)と連動して、個々の副助詞の史的変化の用例採集、記述的把握を行う。個々の形式が、副助詞用法を獲得する以前、また、副助詞用法獲得後にどのような名詞性を示すか、また、その名詞性を持たない(失う)場合はその過程や条件について、考察する。語彙的意味や、形態統語論的な位置づけと制約などを基準として整理する。具体的には、(1)で整理した名詞性の指標となる環境(ノ、ダ・ナリ後接、格助詞後接など)構成句(連体句構成、述語句構成、副詞句構成、項名詞句構成など)文中位置などを指標とする。

例えば、名詞の出現位置の1つとされる「XのY」句のX位置は、ダケ・ホカ・キリの副助詞用法獲得の初期段階から観察され、完全に助詞化した用法においても保持されている。このような環境での様相や内実の変化を精査することは、「名詞性」とその形式化・文法化の関連づけに大きな示唆をもたらすと予想される。

形式の選定にあっては、類型的変化と個別の制約を包括的に把握するために、名詞由来群(ダケ・ホド等) 由来不明群(バカリ・サヘ・ダ二等) 複合構成体由来群(ナド・ヤラ・ナラデハ...)に目配りしながら形式を選んでいく。これらの対照的把握により、名詞由来群の文法変化の特徴、出自に関わらない副助詞の史的変化の類型性を把握する。

## 4. 研究成果

### (1) ダケ・バカリの史的展開と名詞性について

ダケについて、主にそのノ連体用法の消長に着目して以下のことを明らかにした(雑誌論文:宮地 2016)。ダケの由来する名詞タケ(丈)はノ連体用法を持たない。ダケのノ連体用法は、量を表す副詞句構成用法の獲得、機能語としての濁音化、接辞化ののちに「獲得」された近世・近代期を通じた機能語としての変化の中で、a項名詞句構成、b任意の要素に後接する焦点付与の機能語化を通じて「拡張」してきた。はノ連体用法がある種の名詞にはないことを示し、は副詞性(量性)とノ連体用法の関わりを示す。一方、aは項名詞句としての名詞性、bは不変化詞、句末という形態統語的側面、つまり名詞性というより(それを内包する)体言性によって拡張維持されているものと説明できる。この研究成果は、漠然と「名詞性」とされてきた現象面の把握を精緻化したものであり、他の名詞由来副助詞のみならず名詞由来でない副助詞の様相にも整合的な把握を導くものである。

焦点要素となった副助詞が示す名詞性(格助詞の後接、ノ連体用法の拡大)の獲得過程についても、ダケ・バカリの観察とりわけ近世から明治大正期の資料の精査によって考察を深めた(図書:宮地 2019)。ダケには中世以来「主節述語の事態量」を表すという制約があり、ノ連体用法で名詞句を構成していても、意味的にはその名詞を介して述部の量を表していた。しかし、ノ連体用法では、ダケ句の係り先は直後の名詞という解釈が成り立つ。ノ連体用法が再分析の環境条件となって任意の文中要素の「量化」、すなわち焦点化を担う副助詞への機能変化を果たしたとする見方を得た。

限定を表すダケの機能変化、とりわけ20世紀初頭の接語化に関しては、「XダケノY」句を再分析の環境とする見方について繰り返し検討するとともに、「Xダケハ」など主題化された条件での限定解釈の成立についても考察した。ノ連体用法は、17世紀に確立した副助詞ダケが現代まで一貫して示す構造であり、再分析の土壌として適格である。一方、ダケハ文では述部が否定の場合に限定解釈が顕著であって、意味変化において看過できない。ひきつづき諸条件の相互関係を考察していく必要がある(雑誌論文:宮地 2017、2020)。

一方、ダケが副助詞でありかつノ連体用法を示すのは、項名詞句としての分布や、助詞を伴わずに句末に立つという形態統語的特質によって支えられていると考えられる。バカリにおいても、同様の用法の広がりや形態統語的な体言性を兼ね備えて「名詞性」を保持している。このことは、副助詞句の表す名詞性において、もっとも基盤的(最小限)の条件として着目すべきは、不変化という形態的特質であることを示しているだろう。この見方をしてこそ、ダケ・バカリのように、拘束性・制約の高い機能形態(接辞)から、自由度の高い機能形態(接語)への変化を果たしてなお名詞的な分布を保持することに対して説明が与えられると考える(雑誌論文:宮地 2020)。

### (2) 副詞性と名詞性の関係、名詞としての分布と機能変化に関する考察

副詞、並列助詞など、名詞性を示す副詞句構成要素の史的動態について、一線の研究者を招いてシンポジウムを開催し「量」的な性質を介した名詞性と副詞性の往還に共通点を見出した。(2016平成28年度名古屋大学国語国文学会春季大会シンポジウム)。漠然と「名詞性」とされてきた現象の説明に再考を迫り、副詞句構成要素の示す名詞性に対し広く整合的な把握を導く成果といえる。

量的な意味を表す副助詞は、量属性を表して、述語句構成用法を持つ。副助詞だけでなく、述部に立つ名詞類も、名詞として連体修飾節をとりながら述部に立つことで、モダリティやアスペ

クトを表して文末で機能語化する。これは現代日本語に顕著な文末名詞文の構造であるが、古代日本語でも確認できる(図書: Miyachi, 2020. in Tsunoda (ed.))。古代日本語では、副助詞用法を持つバカリが、連体節をとり述部に立つ条件でこの構造に参加する。この点は、興味深い言語事実であり、名詞としての振る舞いと、機能変化の關係に示唆を与える成果である。

### (3) 言語の動態と構造、研究課題の理論的整理

副助詞の史的展開を考察する中で、日本語史研究と言語機能の追究の關係性について考察し、文法変化や言語の動態の把握とその論証の方法について、枠組みの整理を行った(雑誌論文: 宮地 2017)。

個人に発する新用法(変化)の案出から、試行、共同体言語での採用までの段階性を整理し、文法変化を含む言語の動態と、個人の言語機能を矛盾無く関係づけようとしたものである。個々人の文法における語彙項目の位置づけが個人差・および言語変化の鍵となるとの見通しを得た。言語の動態に対する構造的説明をめざす本研究にとって基盤的な枠組みの自覚的整理と位置づけられる。なお、これらの整理は、国内外の理論言語学の研究者との研究交流、国際ワークショップ、ならびにメールやオンラインミーティングによる意見交換によって得られた成果でもある。

幅広い領域で行われている副助詞研究および助詞の文法史に関する学説史に関しても、再検討し、今日的な観点からの課題の再確認を行った(雑誌論文: 宮地 2019, 2020, 図書: 宮地 2018)。

### (4) 名詞出自でない副助詞類の考察

名詞以外の出自を持つ副助詞の事例として、ナラデハの史的展開について考察し、2件の口頭発表を行った。ナラデハは条件節末に出現する「断定辞ナリ+否定接続辞デ+助詞ハ」からなる機能語の複合構成体に発し、中世後期にはシカ相当の否定極性の限定構文をなす接語となった。近代期には、連体句「XナラデハノY」、述語句「YハXナラデハダ」に用法が集中し、現代語では「XナラデハノY」への偏りがさらに顕著となって、不変化の体言性接辞へとさらなる機能変化を遂げている。その史的展開は、名詞由来でない要素が副助詞化し、さらなる機能変化において「名詞性」を拡張していく事例そのものである。接語から接辞へという機能変化を示す点でも、副詞性と名詞性の交渉という観点からも、さらなる追究の余地がある。

### (5) 副助詞という範疇と名詞性の關係の再検討: ノ連体用法の消長から

本研究では、副助詞類の名詞的振る舞いを観察する中で、とりわけ、ノ連体用法が、副助詞類の文法変化の動因として、また再分析の環境として着目することとなった。

ノ連体用法に関し、副助詞のなかにはこれを示すものと示さないものがある。現代語では多くがノ連体用法をもつが、古代語のサエ・スラ・ダニ、現代語のシカ等はノ連体用法を持たない。このようなノ連体用法の可否は、述語句構成用法の可否とも相関があり、副助詞類の史的展開に大きく関与していると考えられる(雑誌論文: 宮地 2020)。

副詞においても、ノ連体用法の可否が見られるが、古代語のほうがより広く、現代語でノ連体を示すものはほぼ量の副詞に限られる。ノ連体用法は、不変化・無活用の形態、体言に広く共通するが、体言類の様々が見出すノ連体の様相も、また、様々である。

また、副助詞類の史的变化には、ノ連体用法での偏在や特徴的な運用が見られる場合がある。ダケ・バカリ・ナラデハ等はその一例であるが、これらには、名詞出自という共通点はない。副助詞類の様相を考えていくために、古代語でノ連体用法を持ち、副助詞・係助詞とも共起する副詞タダの観察にも着手した。

付属的な機能語としての副助詞類のみならず、自立的な名詞・副詞にわたって文法変化を生じるナラデハ、タダのような形式へ考察を広げるなかで、体言性という見方のもと、ノ連体用法を観察していく必要があるという見方に至った。無活用語句におけるノ連体用法の可否の要件はどこにあるかを追究する必要がある。新たな研究課題として問題設定し、本研究課題の成果と問題意識を発展的に継承して、「日本語における体言性と機能変化の相互關係」(基盤研究C、2020年度~)として取り組んでいく。

(以上)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 宮地朝子	4. 巻 20-2
2. 論文標題 副助詞類の史的展開をどうみるか：これからの文法史研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 57-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 宮地朝子	4. 巻 2
2. 論文標題 副助詞研究の軌跡と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 43-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/jouhunu.2.43	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 宮地朝子	4. 巻 17-2
2. 論文標題 日本語史研究と文法性判断	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 宮地朝子	4. 巻 3
2. 論文標題 ダケノ句の史的展開 副助詞句の名詞性	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究』ひつじ書房	6. 最初と最後の頁 155-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮地朝子	4. 巻 59
2. 論文標題 学会時評 日本語の歴史的研究 2015.1-2015.6	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 リポート笠間 / 笠間書院	6. 最初と最後の頁 92-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 中古中世の副詞「ただ」と副助詞・係助詞
3. 学会等名 「通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開」通時コーパス活用班合同研究発表会 (於・東洋大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 「ならで/ならでは」の史的展開 記述的把握から
3. 学会等名 日本語文法史研究会 (第21回) 2018年9月10日, 東洋大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 「ならで/ならでは」の一語化と機能変化
3. 学会等名 第3回 日本語と近隣言語における文法化ワークショップ (GJNL-3) 2018年12月8日、東北大学 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 ダケの接語化に関する一試論
3. 学会等名 第2回 日本語と近隣言語における文法化ワークショップ (GJNL-2) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 副助詞ダケの"名詞性"
3. 学会等名 平成28年度 名古屋大学国語国文学会春季大会シンポジウム 「副詞と名詞の交差 機能語の形成・派生と文法変化」 (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 日本語史研究と文法性判断
3. 学会等名 日本語文法学会第17回大会シンポジウム「文法性判断に基づく研究の可能性」 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 ダケノ句の史的展開 副助詞句の名詞性
3. 学会等名 NINJAL国際シンポジウム「文法化：日本語研究と類型論的研究」 (国際学会)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 宮地朝子
2. 発表標題 日本語シカ・ダケの成立と文法変化：名詞から副詞句・焦点句構成へ
3. 学会等名 第40回応用言語学講座公開講演会：文法の変化（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Tasaku Tsunoda (ed.), Tasaku Tsunoda, Kan Sasaki, Asako Miyachi, Michinori Shimoji, Joungmin Kim, Fubito Endo, Fuyuki Ebata, Hiroyuki Umetani, Shiho Ebihara, Satoko Shirai, Kazuyuki Kiryu, Atsuhiko Kato, Masato Kobayashi, Yasunari Imamura, Kazuhiro Kawachi, Kiyoko Takahashi, Masumi Katagiri, Megumi Kurebito.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 868 (担当箇所：168-232)
3. 書名 Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction with Biclausal Appearance (担当箇所：`Mermaid Construction in Old and Early Middle Japanese' )	

1. 著者名 金沢裕之、矢島正浩、岡部嘉幸、揚妻祐樹、小野正弘、川瀬卓、金水敏、坂井美日、清水康行、野村剛史、野村雅昭、宮内佐夜香、宮地朝子、村上謙、森勇太	4. 発行年 2019年
2. 出版社 笠間書院	5. 総ページ数 323 (200-227)
3. 書名 『SP 盤落語レコードがひらく近代日本語研究』（担当箇所「SP 盤落語資料のダケ・バカリ」）	

1. 著者名 青木博史、池上尚、大木一夫、岡崎友子、岡部嘉幸、久保蘭愛、小柳智一、富岡宏太、蜂矢真弓、福沢将樹、宮地朝子、森勇太、吉田永弘	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 308 (251-265)
3. 書名 『日本語文法史研究4』（担当箇所：【文法史の名著】此島正年著『国語助詞の研究 助詞史素描』）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



## 6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 科研費によるワークショップ（I-言語とE-言語、言語機能の個人差と言語の動態について）	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 科研費によるワークショップ（語彙の意味と文法：多機能と動態）	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 科研費によるWS（WS1 言語理論の日本語文法研究への応用について / WS2 文献データによる理論的仮説の検証について / WS3 実験データによる理論的仮説の検証について）	開催年 2015年～2015年

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	南カリフォルニア大学	スタンフォード大学	